

本日のヨハネ福音書6章41節から59節のところを要約するならば、イエスは天から降って来たパンであり、命のパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。さらに、イエスが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。イエスの肉を食べ、その血を飲まなければ、イエスを信じる者たちの内に命はない。イエスの肉を食べ、その血を飲む者は永遠の命を得る。なぜなら、イエスがその人が死んだ日に復活させるからである。さらには、イエスの肉を食べ、その血を飲む者は、いつもイエスの内にいることになり、イエスもいつもその人の内にいるようになる。それはあたかも、生きて人間に導きを与えている神がイエスをこの世にお遣わしになってイエスが生かされているのと同じように、命のパンであるイエスを食べて、その血を飲む者はイエスによって生かされ続ける者となる。ここでの命は永遠の命を表すゾーエーというギリシャ語が用いられています。

およそ、そのような内容のことをイエスはカファルナウムのユダヤ教の会堂で話されたという設定になっています。けれども、この41節から59節でイエスが語られている内容は、ヨハネ福音書の核心部分であり、キリスト教の教理そのものでもあるのです。

さて、本日のヨハネ福音書を理解するうえで、旧約聖書の生命観を抑えておく必要があります。

創世記2章7節に『主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に息を吹き入れられた、人はこうして生きる者となった』とあります。神が人を形づくったとき、神は人と面と向かって、その鼻に息を吹き入れられて、人間を生ける存在にした、<sup>1</sup> というのです。つまり、人は神の能動的な業によって生ける存在になったのであって、この神との繋がりによって生ける存在になったということです。ですから、もし神との繋がりが消滅したならば、人はただ滅びゆく存在でしかないという生命観が根本にあるのです。神との関わりがなければ、人間は土の塵でつくられたはかない存在だということです。生きた神の関わりがあって初めて人間は、この世において生ける存在になったのですが、この関わりは人間の死後も絶えることがないという人間観をもっているのです。そして、この世における人間の死後も神によって生かされ続けていることを永遠の命と言っているのです。47節で『信じる者は永遠の命を得ている』という表現は、死後の命のことを言っているのではなくて、この世において神と結びついている命のことを言っているのです。

ですから、人間の命を生かすパンという表象が用いられていますが、人間は基本的に神によって生かされて、神と結ばれた存在であるということが大前提としてあるのです。イエスの肉を食べ、その血を飲むことで永遠の命に至るとするのは、イエスが具体的に人間と神との結びつきを仲介しているからだということです。そのことが、イエスを信じる者の内に永遠の命があることに結びつき、イエスを信じる者をイエスは終わりの日に復活させることで、神との結びつきを確かなものにするということです。いずれにしても、旧約聖書から連続と続いている神と人間の結びつきが、イエスの復活が先駆けとなって、私たち人間を死後も復活させて、神とのゆるぎない結びつきの中に招き入れてくれたということです。そのことによって永遠の命という表現で、死後も神との繋がりが途絶えることがなくなったのです。

41節にあるように、イエスが「わたしは天から下って来たパンである」と言ったことに

対して、ユダヤ人がイエスがヨセフの息子ではないかとおぼやき始めたというくだりがあった。ユダヤ人たちがイエスの発言に異議を唱えているのは、紀元後80年にユダヤ教がユダヤ教の中一派であるキリスト教徒たちを会堂から追放した歴史的事実が反映されているようです。ヨハネ福音書にはしばしばイエスに対して無理難題なユダヤ人という表現が出てきますが、ユダヤ教の中の一分派のような当時のキリスト教徒がユダヤ教から追放されてユダヤ教と一線を画したことによって、キリスト教が旧約聖書の生命観を引き継いで、復活思想が入り込むことによって、死後も神との繋がりを持っている人間存在を表す表現として、永遠の命を持つ存在としてのキリスト者の自己認識が強められたように思われます。

さらには、イエスの肉を食べ、その血を飲むという表現はキリスト教独自のものですが、このような表現はいわゆるカルバニズム思想が根底にあります。カルバニズムというのは、人間が人間の肉を食べる習慣のことですが、初代教会では、聖餐式の儀式の表現が、カルバニズムと誤解されたようです。けれども、カルバニズムと紙一重で違うことは、イエスの肉と血が実際の血肉ではなく、あくまでイエスの存在を象徴するものだという点です。イエスという存在が人間と神との結びつきを仲介するものであり、56節で『わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる』と表現されているのは、イエスを仲介者として、人間が神の内にとどまり、神の内人間がとどまり続けることを言い表したもののなのです。ヨハネ福音書は紀元後100年ぐらいに書かれた福音書ですが、キリスト教の信仰者は永遠不滅の命を持ちたいという人間の願望によって宗教的な躍進をしたのではなくて、死後も神との一体性を表す永遠の命に生きるという旧約聖書から受け継いだ生命観をてこにして、現在を生きることの大切さを説く宗教となったのです。

2

旧約時代にイスラエルは食糧難からエジプトに身を寄せた時代があって、エジプトから文化的に多くの影響を受けましたが、エジプトの死後の世界観は拒絶しました。現生の生き方が死後の世界に影響を受けると解釈してしまうと、現生の生き方がおろそかになってしまいます。死後の世界の比重が大きくなると、現生の生き方までもが死後の世界観に支配されてしまいます。けれども、神が死後も現生の時と同じように、信仰者と共にいるという解釈によって、人間は生きているときも死んだ後も、神に生かされてある存在だという確信が、現生において生きる力を生み出していくことにつながると解釈したのです。こういう観点から見ると、イエスが本日(今日)の聖書個所で言っていることは、神が信仰者とのようなときも一緒に寄り添ってくださるという、至極当たり前のことを言っていることになりません。イエスの時代のユダヤ教が、自分の信仰的な行為の積み重ねによって救われるという打算的な救済観に陥ってしまっていたために、イエスが述べた旧約以来の神の恵みに気づくことなく、キリスト教を追放してしまっただけのために、永遠の命に至る道にたどり着くことができなくなっ

てしまったのです。

けれども、現代に生きるわたしたち信仰者も、永遠の命に生かされている恵みを、永久不滅の命を持つような信仰観に変質させてしまう危険性といつも隣り合わせであるということに心を引き締めたいと思います。イエス・キリストを通してのみ、神に生かされた死後の命もあるのだということに希望を抱いて、この世にある命を十分に全うさせていく務めを負っていることを改めて心に覚えたいと思います。